知恵の樹
No. 158 2011. 4. 20
町田の図書館活動をすすめる会
事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

図書館・この こよなきところ

桃 澤 洋 子

「そうだ、京都へ行こう」、そんなコマーシャルがあるが、私の場合は「そうだ、図書館へ行こう！」。そう決めると細胞がみずみずしくなり、頭のはたらきも少しはマシになって、着る物なども少しはマシにして出かけることになる。お気に入りは4階か 5階の雑誌コーナー。ゆるやかにカーブしたガラス越しに早春の日ざしが注ぐ。太い柱を中心にぐるりと座席があり、空いていれば素早くそのひとつを確保する。新刊の歌集と詩集を膝に、至福の時がはじまる。もっとも同じことを考える人は多いようで、恋人同士、居眠り中、ケータイに夢中、と人さまざま。いわゆる団塊の世代が定年を迎えた頃から、ここは一段と賑わうようになった。賑わいながら互いに節度をもって場の空気を壊さないのがいい。

4階には＜喫茶・けやき＞がある。コーヒー・ベーグル・あんみつ・おにぎり。豊富な品揃えだ。どうも老女の視点が先行してしまうのだが、この町田市立図書館には行政・職員・市民が力を合せて、「全市民に開かれた図書館、全市民に役立つ図書館」を目指してきた歴史がある。私も関ったごく初期の要望書や請願事項を記すと次のようである。

1971 年には「玉川学園親子読書会へ図書の団体貸出し」を、1977 年には「市立図書館の日曜開館」を、「市立図書館へ司書の配置」を、「センター図書室を図書館の分館に」、そして 1983 年には、「市立図書館の資料費の増額」を、「図書館職員と司書の増員」を、「図書館協議会の設置」を、などなど・・・。

図書館行政に見識と理解のあった大下市長、そして市長に苦言と助力を惜しまなかった浪江虔先生の存在、専門職の館長として招聘された酒川館長、熱意ある職員の方がたのお陰で、私たちの願いの殆どを実現させることができた。時には対立もしながら図書館をよりよくする運動に関わって来られたことを、しみじみと有り難く思い出す。

もっとも、こんな感傷に浸っているヒマ人は私だけで「町田の図書館活動をすすめる会」の仲間たちは、増山代表を先頭に粘り強く愉しげに活動をすすめている。この会は、図書館を運営する者・図書館で働く者・市の職員・図書館を利用する者・学者研究者らが対等の立場で一堂に会し話せるのがいい。もはや役にも立たぬ身ながら出席を心がけようと思う。

ベビーカーを押す若い婦人とすれちがう。いろいろな方が足を運んでいるようだ。守谷館長が急ぎ足で通り過ぎる。忙しそうだ。身体に気をつけて、心の中で声をかけた。いま、図書館をめぐる状況は厳しいと聴く。図書購入費や職員の配置、建物の維持。委託の問題も他人ごとではないのかも知れない。

でも、町田市は多くの先人たちの願いを受けとめて、何としてでもこの伝統を守ってほしい。私は＜喫茶・けやき＞に寄ってから帰ろう。

（会員）

図書館は、市直営！　鶴川駅前公共複合施設この秋オープン

～建設および運営のための市民ワークショップに関わって～

柿の木文庫　鈴 木 真 佐 世

鶴川駅前公共施設は、2012 年 5 月に完成、秋には全館でオープンします。この公共施設の大きな特徴は、「ホール・図書館・コミュニティ機能からなる複合施設であり、各部門がそれぞれの機能を発揮するとともに、3部門が密接に連携することで、複合の効果を最大限に発揮することをめざす」点と、「市民および市民活動団体が、その運営にも関わることをめざす」という点です。

そして、単に箱モノを作るのではなく、鶴川に住む人たちの心の豊かさやゆとりを生みだし、鶴川地域のイメージ向上に寄与できるような公共サービスをめざすという理想も掲げられています。

このようなコンセプトが出来上がるまでに、市が 3 年半にわたって、20 回にわたる建設のためのワークショップ、引き続き 6 回にわたる管理運営計画のためのワークショップを開き、地元住民団体等の代表者と学識経験者で構成された調整会議、そして検討委員会(後述)を開いて、市民や住民の意見をくり返しくみ上げてきました。

このようにスタート段階から最後まで何度もワークショップを開いて来たのは、町田市では初めてのことで、新しい試みだと思います。私は、両ワークショップと検討委員会のメンバーとして、多くのメンバーの方や、図書館、市役所の方、コーディネーターの方と一緒に、施設になにを入れたいかという構想からから始まり、どのように運営していくかまでずっと話し合いに参加してきました。

建設ワークショップメンバーの立場で、「知恵の樹」に今まで 2 回ほど(2007 年 10 月と 2008 年 9 月)図書館部分を中心に寄稿させていただきましたが、初めてお読みになる方もいらっしゃるので、建設ワークショップから管理運営ワークショップまでどのように検討を重ねて現在に至っているのかを書かせていただきます。

◇利用しやすく、働きやすい魅力的な図書館をと願って

2007 年 8 月、市の企画調整課による計画の下、「**施設建設のための市民ワークショップ**」がスタートしました。11 月には、基本構想が確定し、その後基本設計完成に向けて 30 名前後のメンバーが、ホール部・図書館部・コミュニティ部の 3 つの部会に分かれて、また時に全体会で、それぞれの施設の配置や広さ、他の機能との連携などについて 20 回にわたり話し合いを重ねてきました。私を含めた柿の木文庫の会員 3 人は、図書館部のメンバーとして、多くの人が利用しやすく、そして職員の方も働きやすい魅力的な図書館になるようにと願って、毎回話し合いに積極的に参加してきました。限られたスペースに皆の希望がいっぱい詰め込まれ、コーディネーター役のコンサルタント(大学の先生)がそれを調整しながら、だんだん形になって行きました。

2009 年 8 月には施設の基本設計が完成、2009 年 12 月で 20 回にわたる建設に関するワークショップは終了し、その討議内容を踏まえて、2010 年 3 月に実施設計が完成しました。

ただ、図書館部分については、1 階からも 2 階の図書館の本が見えるようにしたいという設計者の考えで、図書館フロアの回りの部分が一段高くなるように段差を設けるという設計がこの段階でもまだ生きていたので、それでは利用者にも不便、職員も作業をしにくいということで、私たちもくり返し再考を訴え、図書館側が粘り強く交渉を続けた結果、実施設計完成数ヵ月後にやっとフラットな図書館の実現にこぎつけました。

そして、10 月には入札が終了して業者も決定、約 20 億円の予算のもとに、いよいよ建設工事も始まりました。2011 年 1 月 21 日に現地で行われた起工式に参加した時は感無量でした。

◇期待される鶴川の文化ゾーン

「管理運営のための市民ワークショップ」の市の担当部が市民部に替って、2010 年 9 月に始まりました。今年 3 月 23 日までの 6 回の集まりで、公共施設のあり方、自主事業、管理運営の方法、どこが担うかなどについて話し合ってきました。このワークショップをまとめていったのは、「シアターワークショップ」という劇場ホール会館建設、管理運営に関するコンサルタントです。毎回グループに分かれて話し合いながら、ポストイットに自分の意見を書いて模造紙に貼っていき、まとめ役に当たった人が皆の前でそれをまとめながら発表、終わりに参加者は、感想、言い足りなかったことなどを紙に書いて提出して帰ります。次回の集まりには、各自が書いたこととそれに対する内容によって、コンサルタント側から、あるいは市側や図書館側からのコメント・回答が配られるのです。そして、それらを踏まえて一歩前進したものが提示されます。一人ひとりの意見がきちんととらえられている実感があり、実際に、今年 3 月の最後の集まりで提示された管理運営計画案にはワークショップで出た意見が生かされているように思いました。

さらに、ワークショップと並行して、専門的見地からの助言や近隣団体からの意見をきくために、施設の事業や管理に詳しい外部の学識経験者 2 名と近隣団体の代表者等とで構成された検討委員会も 3 月 24 日まで 4 回にわたって開かれました。私もワークショップメンバーの代表として参加し、ワークショップで挙げられた意見と市側の考えを合わせて実現可能な方向に検討を重ねてきました。

今後、庁内調整をしたのち、5 月には市から管理運営計画が正式に発表されることと思いますが、図書館については、町田市立図書館ネットワークの鶴川地域おける中心図書館として設置され、蔵書数 9 万冊、閲覧席 100 席を有する利便性の高い施設として、ホールやコミュニティ機能を通じて感じた興味を、さらに深めたり繋げたりできる資料を市民に提供してくれることをめざしています。

◇運営形態の違う複合施設に関わる市民組織に期待する

最初に記した、この施設の大きな特徴である「3 つの機能の三位一体の効果的な運営」というのは、理想ですが、ホールとコミュニティは指定管理者が運営、図書館と行政窓口は市の直営であり、又開館時間もそれぞれ異なる中でそのことを実現していくにはどうしたらいいかは随分議論されました。そして、一体的な事業運営をするために各施設調整組織というものを置き、そこに各機能の代表と共に市民参加組織の代表も加わって、事業の企画などを提案、調整することが運営計画案に盛り込まれました。

調整会議がきちんと機能するようになるか、市民参加組織が今後どのように組織され、どのように調整会議に主体的に関われるかが、施設が本当に市民のための複合施設となるかどうかの大事なポイントだと思います。

ホールについては、市民は利用者でもあり、コンサートなどを企画する事業者の立場にもなります。図書館については、多くの市民は利用者でありますが、市民の中でも私たち文庫やお話しボランティア、本に関わる活動をしている人たちはお話し会や講演会などをすることで事業をする立場にもなるのかなと思います。そして、コミュニティ部分においては、市民は文化活動や体を動かす活動を自らするために部屋を借りる利用者にもなり、講演会や講習会などの事業を主催する立場にもなります。事業を主催する際に、市民参加組織や施設調整組織において他の部門との連携を図ったり、サポートを受けたりできれば、より活発に活動できるようになりますが、自分達の活動だけでなく、このような調整組織に参加することは、その団体や個人にとって負担となることも懸念されるので、特にスタートからしばらくは市と運営指定業者のサポートが欠かせず、スタートが肝心であるとも思います。

来年の完成を楽しみにしながら、柿の木文庫として、新しい図書館にどのように協力できるかを話し合っているところですし、個人としても、新しい施設での活動にどのように関われるかを考えています。

どの本読もうかな？

～2010年子どもの本をふりかえって～

講師：　広瀬恒子さん　（親子読書地域文庫全国連絡会代表）

十数年にも及ぶ恒例行事、広瀬氏による講演「どの本読もうかな？」が、3 月 8 日(火)2 時より中央図書館ホールにおいて行われた。旬の本を見極める、広瀬氏の慧眼にふれたひとときであった。

＜参加者38名＞

子どもの本の周辺から

● 昨年は国民読書年として、地域でさまざまな活動が行われたと同時に、電子書籍元年でもあった。電子書籍がこれから先急速に普及されるであろうことは、児童文学とて例外ではない。共存はやむなしと思うが、絵本のように表紙から裏表紙まで、好きな所を何回でも行きつ戻りつできる紙媒体は、子ども時代には変わらず親しまれていくのではないか。

● 後藤竜二氏、沢田としき氏、佐野洋子氏が逝去された。佐野氏は絵本に新時代を築いた人であり、後藤氏は町田の親子読書会発起人の一人として、読書活動にも深く関わり、全国からも悼む声が高かった。

児童出版の動向

年間 3000 タイトルといわれていた児童書新刊が、昨年初めて3000点を切った。この10年で初めてのことであり、今までのような新刊を出すことで成り立つ経営方法が、息詰ってきた表れでないか。

内容面から

国民読書年であったゆえか、「わくわく図書館」シリーズ(アリス館)など、今まで扱われることの少なかった、読書や図書館をテーマにしたものが多かった。特に絵本では『ぼくのブックウーマン』(さ・え・ら書房)、『よめたよ、リトル先生』(岩崎書店)、『ぼくの図書館カード』(新日本出版社)等、図書館員、先生、雇い主とそれぞれ異なるが、読み手とそれを支える人の存在をアピールしたものが多かった。

読みものにおいてはバラエティに富み、図書館建設支援を綴ったノンフィクションの『どうしてアフリカ？　どうして図書館？』(あかね書房)、ファンタジーの『つづきの図書館』(講談社)、ミステリーの『ちょっとした奇跡　晴れた日は図書館へいこう②』(小峰書店)、歴史とヒューマニズムを感じる『クロティの秘密の日記』(くもん出版)、『図書室からはじまる愛』(白水社)等、読書や図書館というテーマから、より奥行きを感じさせるものが目立った。

分野別に

絵本では、好きなことにこだわり続けることが実を結ぶと説いた『牛をかぶったカメラマン』(光村教育図書)、『鳥に魅せられた少年』(小峰書店)等、伝記絵本が秀作であった。

これまで、いかに珍しいものを題材にするかが主流であった写真絵本では、『世界中の子どもたちが』(ポプラ社)、『マジャミン』(新日本出版)等、子どもたちの自然な様子を題材にしたものが目立った。ストーリー性のあるものでは『とら猫とおしょうさん』(くもん出版)が、昔話としては落ち着いた絵で完成度が高かった。

『オオカミがやってきた！』(童心社)はストーリィの独自性で、『ナミチカのきのこがり』(童心社)は文と絵の構成において光っていた。主人公の存在感で優れていたものには、浮世離れしていて印象に残る『のまどくん』(文渓堂)、お兄ちゃんの複雑な心境を表した『あかちゃんがやってくる』(イースト・プレス)、感情が変化していく様子がよく描かれている『おきゃくおことわり？』(岩崎書店)が際立っていた。また、ボーダレスな絵本としては、人種問題の壁を描いた『むこうがわのあのこ』(光村教育図書)、古典の絵本化で賛否両論の『ジギル博士とハイド氏』(小峰書店)があげられた。

低～中学年読みものでは、新装版となった『すずめのくつした-新装版-』(大日本図書)、布製原画を挿絵にした『ゴハおじさんのゆかいなお話ーエジプトの民話』(徳間書店)、また『はじめてのゆうき』(小峰書店)は、男の子のお父さんに対する感情がうまく表現されていた。

高学年～YAでは『11 をさがして』(文研出版)、『フォスターさんの郵便配達』(偕成社)、『風の少年ムーン』(偕成社)、『リリース』(ポプラ社)が、友だち、周りの大人や人間社会、親子、と関係は異なるが、それぞれの人間関係の中、どのように格闘し自分をつくっていくか、周りの大人たちの描き方も含め秀逸だった。また、『アギーの祈り』(偕成社)、『モーツァルトはおことわり』(岩崎書店)等、戦争とはと考えさせられるものも多く、特に『ヒトラー・ユーゲントの若者たち』(あすなろ書房)は、子どもたちがどのようにしてその立場に追いつめられていったか、自分だったらと考えさせる奥深さがあり、『マルカの長い旅』(徳間書店)は、娘を置いていかなければならなかった母の苦悩と、置いていかれた娘の苦悩、戦争のみならず人間とは、親子とは、を問う感動作であった。

的確に要約された内容紹介のみならず、テーマの奥深いところ、近年や他の作品との比較など、広範囲に及びながらも簡潔で、あっという間の2時間だった。これからどんな作品が出版され、そしてどんな作品が取り上げられるか、今から来年の講演が楽しみだ。　　(さるびあ図書館　大井久美子)

—まちの図書館、いなかの図書館　5—

移動図書館 40 周年

玉目　哲廉

昨年町田市は、移動図書館 40 周年とのことであった。

40 年前、私は鶴川団地に住んでいたが、町田の図書館を利用したのは、団地の中央公園に移動図書館車が来てからだった。大学3年の秋、その時もらったピンク色のブラウン式の4枚の貸出券を今も持っている。

職員は親切で、生き生きと働いていたので、オリーブイエローのジャンパーがとても格好よく見えた。

町田一小の脇にあった図書館、そのプレハブの土木事務所の後に入った小さい図書館を経て、新館(当時本館・今のさるびあ図書館)をオープンさせた秋に、移動図書館車が3台体制になった。

私は、大学で司書課程を履修していて卒業後は公立図書館に勤めたいと思っていた。幸い町田市の試験に受かった。卒業前に日野市立図書館で2週間の実習をすることが出来、移動図書館「ひまわり号」にも乗せてもらった。町田では6月まで研修が行われ、7月から図書館に配属された。

その頃、移動図書館車は、山崎・木曽・藤の台の大型団地には午前中に2台で出かけていた。そこでは、50 分の駐車時間に 800～900 冊の貸出しをしていた。

10 月を過ぎてしばらくして藤の台団地をまかされることになり、50 分の中でどのようにすれば効率よく返却処理が出来るかを考えた。そこで、巡回日ごとに 50 音順に並べていた利用者カードを、すべてを 50 音順に並べ督促も出来るようにし、返却時の貸出し券を探す時間を短縮した。いろいろ工夫していると利用者も増え、1回の巡回で貸出しが 1000 冊を超えるときも出てきて、他の駐車場にも影響し、団地以外でも 1000 冊を超えるようになった。移動図書館には、多くの利用者が来るところもあれば、子どもが数人しか来ないところもあった。そうした中に小山田大泉寺があった。そこで、天気が良い時に紙芝居の舞台を積み込み、一緒に行っていた女子職員の人に頼んで、子どもたちに紙芝居を読んでもらったりした。

昭和 50 年代後半に、アメリカのシアトルに研修で出かけ、移動図書館車に乗せてもらう機会があった。その移動図書館車は、個人貸出しをしている大型のバスタイプの車で、車の幅が広いせいか内架式でも狭さを感じさせなかった。

他に施設を訪問している小型の移動図書館車もあり、ブックトラックを積んで、いろいろなところにいくということだった。

日本の移動図書館車のほとんどは林田製作所によって作られている。大津町の図書館で館長として働くことになった時に、移動図書館車をつくる機会があった。その時に、1人で行き、貸し出しをし、帰ってこられるような宅配車が理想だったが、特定の会社のライセンス生産になっており、メーカーに話をしても実現しなかった。

そこで、熊本の特製車体を作る会社にこちらの希望を伝え、大津の移動図書館車を設計してもらった。内架式で 1500 冊の蔵書を積み、車椅子を上に上げるリフトを装備している。おおづ図書館のホームページには、その移動図書館車「みらい号」の写真を公開している。

「みらい号」は、町内の保育園・幼稚園・小規模の小学校をも2週間に 1 回巡回しており、保育園・幼稚園ではすべての子どもが利用カードを作るので、子どもの登録率は 100%に近い。

小学校の社会科見学では、図書館に来て本を1冊ずつ借りて帰るようになっていて、公共図書館利用の体験を促していた。　　(会員)

2011年度　第1回　**文学館(主催)で楽しむ**

おとなのためのおはなし会

4月 21日(木)10:30～11:30

町田市民文学館　2F大会議室

プログラム　—3月中止のため、4月に移行—

＊町田ゆかりの作家 「添田知道」　小林陽子

＊月光のうた （マケドニアの昔話） 西村敦子

＊たにし長者 （日本の昔話）　佐々木令子

＊握手 （井上ひさし/作）　神保俊子

直接会場へどうぞ！　無料

読者からのお便り　－157号の巻頭言を読んで－

「お江 戦国の世を生きぬいて」　素晴らしいですね

国松俊英さんが，町田の住人であること、町田市の小学校をモデルに『日本一のいじわるじいさん』という童話を書かれたということは、市民文学館の展示で知りましたが、放映中のテレビドラマそして小学校国語教科書原稿執筆、と興味ある記事でした。

2011 年度から使用する小学校の教科書は，昨年 8 月の教育委員会で採択されました。各社の教科書は教育センターにあるはずです。中央図書館の教科書の棚にはまだ現行分しかありませんが、4月になれば配架されると思います。今一度インターネットで調査研究資料を検索しますと、教育出版国語 6 年に文学的な文章・読書の分類で「伊能忠敬」国松俊英著が見つかりました。

もう一つ，東京書籍国語 5 年に「手塚治虫」があり，こちらは説明的な文章に分類されていました。

教科書の文章を書くのは，子ども相手ですので，より正確に書かねばならないでしょうし，わかりやすくしなければならないので，大変だとは思っておりました。それだけにそのご苦労がよくわかる記事でした。

エルシーに泊りこんで図書館を活用する，こういうプロもいるのですね。私も図書館で調べ物をしていて，閉館ですといわれることが多く，裏から入って調べたいと思う位ですので，隣のホテルというのも穴場ですね。ちょうど原稿や頭の整理もでき，本からの霊気が部屋まで届くのではないかと推測します。

(町田市教育委員 井関孝善)

第 13 期図書館協議会第 16 回定例会　　＜2011 年 2 月 11 日(火)9 時 30 分～11 時 30 分開催＞

◎館長報告事項

1：図書館嘱託職員採用経過

10 名募集のところ 223 名が応募。適正試験と論文審査、面接を実施。

平成 23 年度は嘱託職員の人数は 100 名近くになる。

2：忠生市民センター建替えに伴う図書館建設進捗状況

2014 年度建て替えに向け、忠生に地域館を建設予定。金森図書館程度の規模を想定。

・運営のポイントとして

① 中規模館に位置づける(利用範囲は2km圏内)

② 「子ども読書活動」推進モデル図書館

③ ICタグ利用。これに伴い、既存のBM〈ポイントの見直し(統合)〉も検討中。

図書館としては、近くにある既存の木曽山崎図書館も団地利用者のために残したい。

3：平成 22 年度包括外部監査報告

図書館についても報告あり。市の HP より閲覧可能。

◎審議事項

館長諮問の図書館の理念と目標について継続審議

今までの審議結果を基に骨子を作成し、メールにて委員間にて確認をすすめる。

◇次回協議会開催予定　4月 19 日(火)　9 時 30 分～

(文責：山口、図書館協議会委員、本会会員)

ひろば

〈例会報告〉2/16(木)18:00-20:30
会報 157 号印刷（16:00～）
伊藤、丸岡、桃澤、増山

出席者: 石井、伊藤、斎川、鈴木、玉目、津田、手嶋、野角、増山、丸岡、桃澤、山口、山本

● 新規参加者のため、ひと通り自己紹介から･･･嘱託組合のすすめる会担当メンバーの交代（津田桂子さん、山本香織さんが新メンバーに。斎川さん、高橋（峰）さん、は個人会員に）。

● **「臨時、非常勤職員の処遇改善・雇用安定に向けた法改正をもとめる署名」について**･･･嘱託労動組合野角委員長より協力依頼。図書館の活動にいつも市民の方が関わっている町田は、大変恵まれていると感謝。この署名活動も、官制ワーキングプアを生まない社会をつくるための市民運動の一つとして推し進めたいと考えている／すすめる会でも全国の関係団体に協力依頼する予定／第一次集約は3月7日、最終集約は5月中旬。皆さんご協力を！

● **「町田市の図書館評価」について**･･･図書館協議会は図書館長より外部評価者として評価点の判定とそのコメントを依頼され、10 月にこれをまとめた（会報 155 号参照）。今後、図書館の理念と目標を再検討する予定。評価活動にて、今後の改善点や問題点がいろいろ見えてきた。図書館評価のしかたは各自治体でも模索中。ABCの三段階評価で良いのか？ 目標の立て方が難しい。数値で示すか、指標でしめすか／外部評価中に次年度の評価項目を発表しているが、2009 年度にあった評価項目が、2010 年度に無くなっているのがあり、おかしい／内部評価の根拠の一つが利用者アンケートであったが、アンケートの継続は予定されていない。利用者の声を吸い上げるものが必要。図書館協議会の評価は外部評価とはいえないのでは？／評価のチェック点をどう改善するのかが不明。評価してどうするのか？ 評価をどのように使うのか？何のための評価か、なぜそうなのか、の分析か必要では？／内部評価は、公式的にはサービス改善、市民に報告する姿勢であるが、職員が自ら自分の仕事を見直すことに意義がある／次回、再度討議する。「町田市の図書館の評価」を再読してくること。

● **東京都多摩地域公立図書館大会**（2/8･火）の第1分科会「多摩地区図書館の歩みとこれからの展望」が開催された。山口源次郎氏の講演、パネルディスカッションがあった。守谷、手嶋、吉岡、参加／増山の市民からの報告が、浪江虔氏にも触れ多岐にわたり大変よかった。配布資料がなかったのが惜しかった／40 年前に『市民の図書館』という本ができた背景について、当時運動をしていた人々から生の声を聞きたい／歴史を引き継いでいくという点において、話を聞く会を設定したい。

●**全国図書館大会**が多摩地域にて開催される（10/13、14の2日間）。19のテーマで分科会が開かれるが、その一つに「住民自治と図書館」が設定された。テーマは「図書館を支える市民のカー図書館協議会･友の会･市民運動ー」。町田が分科会実行委員のメインとして動いている。

●昨年亡くなられた武井澄子氏のご主人から会報（追悼号特集）を喜んでくださった連絡があった。5月の一周忌には会から花を贈ろう。

●新聞記事「図書館の導入に警鐘」紹介／総務省は「指定管理者制度運用について」の通知文書を出し運用の適正化を促した。片山大臣は、「公共図書館や学校図書館は行政が直営でスタッフを配置して運営すべきだ」としてこの制度が図書館にはなじまないとの警鐘を鳴らしている。自治体首脳陣はご存知か？

●『図書館の基本を求めてⅣ』（田井郁久雄著）新刊。ご一読を！ （記録：津田、文責：M⁴）

あとがき「百聞は一見に如かず」。3/11 地震直後停電となる。この揺れは震度6弱だったのかとニュースに耳を傾け早々と眠る。朝、テレビを見て耳からの情報では想像だにしなかった東北を襲った化け物のような津波の生態を見る。急に出来事は他人ごとではなくなった。人間の尊厳と秩序を保つ被災者の言動を見て世界から賞賛と支援の手が差しのべられている。もし映像の生情報がなかったなら、これだけ多くの人が共感しえただろうか？ 映像によって世界はグローバル化し、一つになろうとしている。全ての時間がストップし後ずさりしている間に新年度を迎え、又、駒が動き出した。（M⁴）

図書館人事異動 （2011/04/ 1 /付け）

＜転出 ／新所属←旧所属＞
守谷信二；生涯学習部長←生涯学習部次長兼）図書館長
神田貴史；生涯学習部生涯学習課文化財担当課長←課長補佐兼）中央図書館庶務係長

＜転入＞
尾留川 朗；生涯学習部図書館担当部長兼）図書館長←地域福祉部長

＜昇格＞
高松昌司；中央図書館奉仕係担当係長（ﾘｸｴｽﾄ）；

＜職名変更＞ 主査⇒担当係長

＜定年退職（新再任用職員）＞
小野雅久（金森図書館奉仕係）、**中山憲一郎**（環境資源部環境保全課）、**中原良一**、**鶴巻美穂子**（金森図書館奉仕係）

＜館内異動（新所属）＞
小林直貴（中央図書館庶務係長）、**今井則子**（中央図書館奉仕係担当係長（ｻｰﾋﾞｽ））、**菅谷繁男**（鶴川図書館奉仕係長）、**山崎厚史**（金森図書館奉仕係長）、**張 研一郎**（さるびあ図書館奉仕係長）